ツーリズムにみる「体験」の意味

久保正秋＊1

The Meaning of The Experience in The Tourism

by

Masaaki Kubo

Abstract

The purpose of this study is to examine the meaning of the experience in the tourism. For that purpose I would like to consider the actual state of the tour in France (Mont Saint-Michel, Place and Park of Versailles, Museum of art in Paris, and Stade Roland Garros). And this study discussed about problems of these tours based on the theory of the heritage tourism and the aesthetic experience. The results of this examination were as follows.

In actuality many plans of tour pursue the efficient use of time. Therefore the tourists can visit and see many points in the limited time. But tourists stay at the point for a short time and immediately they were transported to another points. The theory of the heritage tourism argues that the regarding oneself as a part of the heritage, thinking that experience is important. The efficient plan of tour produces many experiences, but tourist can't regard oneself as a part of the heritage.

The aesthetic experience is based on a kind of pleasant feeling. This feeling can sort the physiological pleasant feeling, the ideological pleasant feeling and the sensitive pleasant feeling. The sensitive pleasant feeling is most important of the aesthetic experience. In the Museum of art the efficient plan of tour offers many appreciations of well-known arts. This experience of many appreciations is not the aesthetic experience. This experience leads to a feeling of satisfaction that I looked famous and well-known things (the ideological pleasant feeling). The efficient plan of tour rarely leads to the sensitive pleasant feeling that I gazed at the impressive art (the aesthetic experience).

序　論

本研究は，「体験活動」における「体験」を，「身体的体験」として捉えなおし，その「身体運動」を中心とした「身体的体験」による「感性教育」のプログラムを構築しようと試みる研究の一部として行われた。この「体験」に関する一連の研究において，かつて我が国の世界遺産をめぐる

＊1　東海大学体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

ツーリズムの現状を調査し，「世界遺産ツーリズムにおける『体験』の意義」と題してその結果を報告した。報告では，多くのプランの道程においてツーリストは短時間，世界遺産エリアに滞在し，すぐに他の有名なスポットへと観光バスで移動されてしまうという現状から，我が国の世界自然遺産のツアーは遺産を，そのツアープランの看板として扱っている点を指摘し，これは世界遺産の体験ではなく，単なる遺産エリアの通過であると批判した。しかしながら，多くの訪問者と長い滞在は遺産にダメージを与えるのであり，世界遺産ツーリズムは遺産の保全と矛盾するという問題点が浮き上がった。その結果，世界遺産ツーリズムは観光デザインの理論（①遺産を思考のメディアとして考える，②自己を遺産の一部として位置づけ，その体験を重要視する，③持続可能性の意味を考える）に基づいたガイドラインに従ってその計画を立案すべきであると主張した。そして次のように結論づけた。「この持続可能性は経済的，社会的利益のためのものではなく，それは社会を超えた世界のための持続可能性として考えられなければならない。ひとがこの世界との本質的な交流の体験を為したとき，世界遺産ツーリズムは思考のメディアを生み出す意義ある出来事となる」[1)]。

今回の研究では「感性教育」における「体験」の意味を検討することの試みのひとつとして，海外における世界文化遺産体験，芸術体験，バックステージ体験を企画するツアーを取り上げ，その現状を報告するとともに，そこにおけるツアー「体験」を「ヘリテージツーリズム」，および「美的体験」という観点から分析することを試み，ツーリズムにおける「体験」と「感性教育」との関連を検討するための資料を提供することを目的とする。

1. オプショナルツアーの概要

今回の報告で取り上げるオプショナルツアーは，1)「モンサンミッシェル」，2)「ヴェルサイユ宮殿」，3)「パリ美術館」，4)「ローランギャロス」である。1）と 2）は世界文化遺産を体験するツアー，3）は芸術体験のツアー，4）はバックステージを体験するツアーとして位置づけている。これらのツアーは，日本からの行程を含むものではなく，現地ツアーとして日本国内で販売されているものである（ローランギャロスは日本予約，現地販売）。以下その概要を記す。

1)「モンサンミッシェル」ツアー

このツアーは世界遺産「モンサンミッシェル」を巡るものであり，東京に本社がある V 社が企画している。V 社では，モンサンミッシェルを対象として，日帰りツアー（ガイド付）7 アクティビティ，日帰りフリープラン 6 アクティビティ，宿泊ツアー 15 アクティビティを提供している。いずれもインターネット上で予約が可能であり，パリからの日帰りアー（ガイド付）の料金は 100€ から 200€（1€＝140 円として 14000 円から 28000 円）である。モンサンミッシェル終日（日本語ガイド・食付き：179€）の日程は 8：00 にパリ出発，途中トイレ休憩約 20 分 1 回，12：30 モンサンミッシェル到着。到着後，昼食。昼食終了後，無料バスにてモンサンミッシェルへ（約 10 分）。ガイドの案内に従って修道院へ。案内終了後，自由時間，約 1 時間。16：45 モンサンミッシェル発，途中トイレ休憩約 20 分 1 回，21：15 パリ着，解散。全行程約 12 時間。内，バス移動時間 9 時間であり，現地での滞在時間，昼食を含め 4 時間 15 分。

モンサンミッシェルはパリから約 300 km の距離にあり，高速鉄道（TGV）を利用しても約 3 時間，さらに駅からバスにて 30 分かかる。このような地理的条件から多くの観光客はバスツアーを利用することとなる。宿泊ツアープラン（ホテル付：滞在モンサンミッシェルのみ）もあるが，高額（230€ から 255€：1€＝140 円として 32200 円から 35700 円）であり，また一般的なパリ観光客の行程を考えても，1 日ツアーが妥当な選択となる。今回のツアーでは，往路のバス内の日本人ガイドの解説が秀逸であった。モンサンミッシェルの歴史に始まり，古代ギリシア，ローマの歴史，十字軍の意味，英国との 100 年戦争の歴史，第二次世界大戦時のヒトラーの言動（「パリは燃えているか」），ノルマンジー上陸作戦（モンサンミッシェルはノルマンジー地区に存在する）の状況，

さらには，映画「ダビンチコード」のキリスト教徒に与えた衝撃の意味など，往路4時間半，ほとんど話し続けた。同行した日本人ツーリストから，「これだけわかりやすく話してもらったら世界史が好きになれたのに」というような感想があったほどである。

2)「ヴェルサイユ宮殿」ツアー

同じくV社の企画する「ヴェルサイユ宮殿」ツアーは，半日ツアー8アクティビティ，終日/コンビツアー10アクティビティ，ナイトツアー2アクティビティを提供している。半日ツアーの料金は29€から79€（1€＝140円として4060円から11060円）である。平均的な半日ツアー（フリープラン料金49€）の日程（午前の部）は8：15にパリを出発しバスで30分程度，ヴェルサイユ到着，ヴェルサイユ宮殿開館の15分前になる。解説は日本語オーディオガイド，入場後，カウンターで機器を借りることになる（機器は一般の入場者にも有料で貸し出している）。12：00頃に現地を出発し，12：45ツアー終了となる。全行程4時間ほど。

今回の調査では個別のツアーには参加せず，全体的なツアー客の動きに注目して観察を行った。ヴェルサイユにはパリから地下鉄，鉄道（RER）を利用して開館30分前の8：30に到着した。既に観光バス6台が到着しており，入口の前には中国からのツアー3団体と一般入場客が20m程の列をなしていた。9：00の開館時には列はさらに伸び，宮殿前の広場の入口までつながっていた（約150m）。先の平均的な半日ツアーが開館15分前に到着であるから，この長い列に並ぶことになる。ツアーの案内に「チケット購入の際にはお待ちいただく必要はございません。しかし，ガイド付きではないため，一般入口を利用する関係上，日によってはエントランスでお待ちいただく可能性がございます」とあるとおり，宮殿内に入るまでにかなりの時間がかかる。さらにカウンターでオーディオガイド機器を借りる列にも並ばなければならない。9：30に入場できたとしても残り2時間30分，宮殿建物外の広大な庭園を散策する時間はない。ちなみに昼頃には，入口前の列は広場内で4重に折れ曲がり，500m以上にもなっていた。ツアー案内の注意に「ヴェルサイユ宮殿では，チケット事前購入の列より入場いただけます。但し入場までとオーディオガイドを借りる際に，お待ちいただく場合がございます。特に，繁忙期には，1時間以上の待ち時間が発生することもございますので，予めご了承ください」とあるように，午後からのツアーでは入場までにかなりの時間を費やすことになろう。

3)「パリ美術館」ツアー

「パリ美術館」ツアーは「ルーブル美術館」と「オルセー美術館」が中心となる。「ルーブル美術館」は半日ツアーと1日ツアー，「オルセー美術館」は午前と午後に開催される英語ガイド付きの半日ツアーである。料金はともに半日ツアーで50€（1€＝140円として7000円）程度，1日（昼食付き）で95€（1€＝140円として13300円）である。「ルーブル美術館」半日ツアー（午前の部）は9：00出発，9：15ルーブル美術館着，入場，9：30からガイド（日本語ガイド）と共に見学開始，12：00美術館内にて解散となる。全行程3時間ほど。「オルセー美術館」半日ツアー（午前の部）は10：00にオルセー美術館前に集合，ツアーの説明等があり，美術館見学は1時間程度，11：45現地解散となる。

「ルーブル美術館」の年間来館者数は800万人を越え，世界一の入場者数を誇っている。美術館内はリシュリュー翼，シュリー翼，ドゥノン翼の3つの翼棟で構成されており，それぞれ4階のフロアーを有している。展示場所の総面積は60,600 m^2であり，1日でその全てを見学するのは不可能である。「ルーブル美術館」半日ツアー（午前の部）でみれば，ガイドによる見学時間は2時間30分，そのごく一部を見学するに過ぎない。また，有名な作品が1カ所に集結しているわけでもなく，「ミロのビーナス」「モナリザ」，フェルメール，アングル，ミケランジェロの作品を求め，館内図を片手に探し回らなければならない（ちなみに「ミロのビーナス」はシュリー翼1階，「モナリザ」はドゥノン翼2階と比較的近いが，フェルメール，アングル，ミケランジェロの作品

はそれぞれかなり離れている)。よってツアーは効率よく有名な作品を見て回れるように構成されている。しかし，数多くのツアーが同時に効率よく回るよう案内するが故に，有名な作品の周りにはツアー客があふれ，じっくりと作品を鑑賞することができない状況もある（ちなみに入館後すぐに，有名な作品の少ないシュリー翼３階から見学を始めた筆者はアングルの作品の前で記念写真を撮ることができた)。

4)「ローランギャロス」ツアー

「ローランギャロス」はパリの西，ブーローニュの森の外れにあるテニス施設，テニスの４大大会である「フレンチオープン」が開催される会場である。「ローランギャロス」ツアーは，先に述べた日本の旅行会社が企画するツアーとは異なり，フランステニス協会（ローランギャロス・テニス博物館）が運営している。毎日，英語ツアーが２回，フランス語ツアーが２回，スペイン語ツアーが１回，計５回のツアーが開催されている（大会期間中は除く)。日本からはＥメールで予約し，現地で支払いをすることになる。料金は 15.5€（1€＝140 円として 2170 円)。ツアー時間は約１時間。

ツアーはローランギャロス・テニス博物館のスタッフが案内する。調査時のツアー参加者は 10 数名。まずは広場でローランギャロスの歴史について説明。その後スザンヌ・ランタンコートの見学。そしてセンターコート（フィリップ・シャトリエ・コート）の建物へと移動。そこでは試合の勝者に対するインタビューを行うインタビュールームに入ることができる。何人かのツアー参加者が選手の席に座り，勝利選手の気分を味わう（写真 1)。そして，一般の人は普段は入れない選手の使用するロッカールームへ移動。ラファエル・ナダル（2005-2008 年，20010-2014 年，計９回全仏オープン優勝者）がいつも使用するというロッカーの前で記念撮影するツアー参加者も多い。その後，センターコートの見学。コート内には入れないが，スタンドのプレイヤーボックス席から見学。その後，入口に戻り，解散となる。



写真 1

2. オプショナルツアーにおけるマネジメント

ここではオプショナルツアーにおけるマネジメントを，その効率と効果という観点から分析することを試み，そしてその問題点を指摘する。

1) 時間的な効率と効果

ツアーには時間を効率よく使うことができるという利点がある。施設によってはツアー専用の入り口がある所もあり，事前にチケットも準備されている。よって施設内への入場は，一般の観光客よりもスムーズに進むことが多い。また交通の便の良いところにツアー集合場所が設置されており，そこからバスで施設の周辺まで移動し，見学後はそこへ戻り，解散であり，地下鉄や鉄道を乗り換えることもない。ちなみに先に述べたように「モンサンミッシェル」の最寄りの鉄道駅までは高速鉄道（TGV）を利用しても約３時間，そこからバスで 30 分かかる。鉄道とバスの乗り継ぎの関係で早朝にはパリを出発しなければならないし，帰路の乗り継ぎを失敗するとその日のうちに帰れないこともある。「ヴェルサイユ宮殿」までも同様に，地下鉄と鉄道（RER）を使用して行くことはできる。時間的にはバスと変わらないが，ヴェルサイユには３つの鉄道駅があり，「Versailles-Chantiers」駅（RER）行きの鉄道を利用した場合，宮殿まで徒歩 20 分かかる。このようにツアーを利用しない場合，予想以上に移動等の時

間がかかり時間を効率よく使うことができない。

施設内の見学に関してはさらに効率と効果が期待できる。専門のガイドが見所を逃さず案内してくれる。広大なルーブル美術館のフロアを2時間30分で，そして有名な作品の多くを鑑賞できるのは，効率と効果を求めたツアー・プログラムの成果であろう。空いた時間を利用して午後からはオルセー美術館のツアーに参加することも可能であり，1日で世界的に有名な美術館2つを巡ることも可能なのである。

2）情報と体験に関する効率と効果

ツアー案内には「館内ではイヤホンガイドをお渡ししますので，ガイドの日本語解説をこのイヤホンを通して聞くことができます」，あるいは「少人数制のツアーでは，作品を鑑賞し，それらがどのようにして個性的で歴史的にも重要なのか，学べる十分な時間が用意されています。ツアーガイドが豊富でおもしろい知識を丁寧に解説してくれます」というようなメッセージが掲載されている。かつてはガイドの声が聞き取れない場合も多かったが，ワイヤレス機器の使用が普及し，かなり離れた場所からでもガイドの解説が鮮明に聞こえ，また他のツアーガイドの声と混ざり合うこともなくなった。「モンサンミッシェル」ツアーのように専門性の高いガイドの解説は明快であり，またその情報は幅広く，個人が文献等を検索して入手できる情報の量と質をはるかに超えている。このことは「ヴェルサイユ宮殿」ツアー，「美術館」ツアーも同様であり，事前に情報を入手する必要はない。最近は，ワイヤレスのオーディオガイドシステムを完備する施設が増加している。今回の「ヴェルサイユ宮殿」ツアーはそれを利用するものであり，またルーブル美術館にも同様なシステムがある。よって，ツアーに参加しなくとも情報を得ることは可能であるが，ガイドシステムは一方的であり，ガイドのように質問に答えてはくれない。

また例えば，「ローランギャロス」バックステージ・ツアーにおけるインタビュールーム，ロッカールームの訪問ように，ツアーに参加することによってのみ体験できることもある。スタジアムやその敷地内はテニスの大会が行われているときは，チケットさえ購入できれば入ることができる。しかし選手が使用する施設内に入ることはこのツアーに参加することによって初めて可能となる。

3）効率と効果の問題点

しかしこれらの効率と効果が故の問題点も存在する。これらのツアー・プログラムが効率よく効果をあげるのは，それがプログラム化されているからである。限られた時間の中で，できるだけ多くの見所を巡るように計画されたツアーは，1カ所にじっくりと佇むことを許さない。かつてある美術館で，気に入った絵画の前で佇んでいた筆者の横を「はい，次に行きましょう。ちょっと急いで」と通りすぎていったツアーの一行があった。プログラムは作動したら停滞は許されない。そしてその「体験」は希薄化し，「体験」というよりも「確認（その絵を見た）」という作業の連続と化してしまうのである。

3. オプショナルツアーにおける「体験」の意味

1）「ヘリテージツーリズム」という観点からの考察

「ヘリテージツーリズム」について山村は「遺産を享受する（ゲストの行為）と，遺産の価値を再確認し他の人々に伝える（ホストの行為）とを通じて交流を促進し，遺産の構成要素の一部として自らを位置づけること」と定義している。さらに彼は，①「遺産」の全体性の把握，②過去・現在・未来という時間軸での思考，③思想のメディアとしての「遺産」の解読，がヘリテージツーリズムのポイントであるとしている[2)]。この「ヘリテージツーリズム」のデザインという観点から「モンサンミッシェル」と「ヴェルサイユ宮殿」のツアーを考察してみよう（「モンサンミッシェル」，「ヴェルサイユ宮殿」はともに世界文化遺産）。

山村がいうように「過去から未来へという時間軸で思考し，遺産を思想のメディアとして捉える」ことは重要であり，それによってツアー客は遺産を享受することができる。「モンサンミッシェル」ツアーの場合，これに大きな役割を果たし



写真 2



写真 3

たのが往路のバス車中におけるガイドの解説である。「遺産」を過去・現在・未来という時間軸の中で捉えるためには，その歴史と位置づけを知る必要がある。専門性の高いガイドの解説はその理解を助けてくれる。先に述べたように，ツアーにおける情報入手に関する効率と効果は高く，短時間に「遺産」の歴史を理解することができる。しかしながら，実際の「遺産」それ自体は思想のメディアとなることはできない。修道士たちが瞑想した回廊は観光客で溢れており，「遺産」の全体を把握し，思想のメディアとして解読することは難しい（写真 2)。また先に述べたように，時間的な効率と効果を求めるツアーは，ひとつの場所に佇み，その場の意味を考えることを許さない。見なければならない（あるいは見せなければならない）次のスポットへと移動することになる。

このような状況は「ヴェルサイユ宮殿」ツアーも同様である。宮殿内の絢爛豪華な王の寝室や鏡の回廊は，確かに素晴らしいものであり文化遺産と言えるが，人混みの中でそれの歴史を共有し，時間軸の中で捉え「体験」することは困難であった。唯一，ヴェルサイユ宮殿の広大な庭園では異なる「体験」をすることができた。

庭園の入口から約 1 km，そこから始まる長さ 1650 m の大運河，入口から運河の先端まで約 3.5 Km（運河は十字計となっていて直線では行けない）の地点，ツアーではここまで足を延ばすことはできない。そこではウオーキングやジョギング，サイクリングを楽しむ人々がいた（写真 3)。その運河の先端から宮殿を望むと，遙か彼方に霞んでいる。水もない不毛の荒野に水を引き，こんなにも広大な運河と庭園を造らせ，そして豪壮な宮殿を築かせた絶対君主とは何だったのか。そしてフランス革命の意味するものに思いを巡らせた。その時，この「ヴェルサイユ宮殿」という文化遺産の全体性を時間軸の中で感じることができた。それが山村のいう「遺産の要素の一部として自らを位置づけ，その関わり合いを体験」することであったのかもしれない。

2)「美的体験」という観点からの考察

宮原は「美的経験」を考察するための概念図式として，物事にふれて感じる快感をその質のちがいによって「生理的快」「観念的快」「感性的快」の三つに分けている。「生理的快」とは 「きもちいい」というような私的な私の快感であり，例えばゆったりとしたソファーに身を委ねるときに感じる生理感覚上の，動物的個体としての快感である。「観念的快」とは一般的な社会通念に照らして「善い」「適切である」「評価が高い」とみなされることにともなう公的な私の快感であり，例えば道徳的に善いとされる行為をしたり，あるいは有名人と会話をしたりするときに感じる快感である。宮原はこれらふたつの「快」は美的体験をもたらすものではないという。「感性的快」について宮原は，ドライブ中にラジオから聞こえてきた音楽に感動したという自らが体験した例をあげる。そしてそれは「きもちいい」というような私的な



写真 4

生理的感覚に尽きるものではなく，また一般社会からの承認がもたらす観念的な快でもないという。さらにサッカー観戦で見事な連携プレイを目にし，「芸術的なパスですね」と隣り合わせ観客に思わず話しかけた例をあげる。この感動は自分だけのものではなく，他者に伝えて初めて完全になるような喜びであり，私的でも公的でもない「共的な私」が感じるものであり，「美しい」「共振する」と表現される「感性的快」なのである[3)]。

この「美的経験」を考察するための概念図式を用いて「パリ美術館ツアー」を考察してみよう。宮原が言うように「芸術体験」が必ずしも感性的な快をもたらすものではない。今回の美術館ツアーでは数多くの芸術作品を鑑賞する機会を得たが，それによって「感性的快」を感じ美的体験をもたらしたとは言い難い。宮原は次のように述べる。

私たちは絢爛たるルーブル美術館の「モナリザ」の前で感動の溜息を漏らす。そこには大量の観念的快が混入している。「世界的名画」「歴史的芸術品」という圧倒的評価から離れられない私たちは，かりに自身が何の感性的快もおぼえなくとも，その場にいるだけで大きな観念的快を手にしてしまう[4)]。

確かに，ルーブル美術館では「モナリザ」の前に行くことはできる。多くのツアー客と共に，柵で仕切られた距離から，額縁のガラス越しに「微笑み」をみる。しかしそこで見ているのは，ダ・ヴィンチの作品ではなく，世界で最も知られたモノである。人混みをかき分け，できるだけ作品に近づき写真を撮る。そして次のポイントとなる作品へと移動する。それは写真で見たことのある名画を実際に生で見て確認したという経験であり，美的な体験ではない。そこで得られるのはまさに宮原のいう「観念的快」であると言える。

美術館ツアーは，このような確認作業をできるだけ効率よく，数多くこなし，多くの「観念的快」をもたらすことを狙いとしている。余り知られていない作品は素通りし，あるいはツアーガイドがその作品が如何に素晴らしいかを説明し，その作品の前にいることの「観念的快」を増強する。無名の，しかし気に入った作品の前に佇むことは許されない。先に「筆者はアングルの作品の前で記念写真を撮ることができた」と自慢したが，これも単なる「観念的快」である（このことは，ツアーによる体験のみならず「芸術体験」全般に言えることでもあり，今後，考察を深める必要がある）。筆者は以前，ルーブルを訪れたとき，芸術作品の前で模写をしている芸術家を見たことがある。その時，その芸術作品ではなく，模写している芸術家に見入ってしまった経験がある（写真4）。そこで筆者が感じたものが「感性的快」であり，美的体験だったのかもしれない。

「ローランギャロス」ツアーにも同様なことが言える。そのツアーにおいての「体験」は，選手以外の一般の人が入れない場所に入ったという「観念的快」を感じるものの，そこにあったはずの選手たちの熱気は何も伝わってこない。全仏オープン優勝者がいつも使用するというロッカーは，159 という数字のプレートが付いている木製の箱であり，実際のテニスの試合の興奮とは関係のない単なるモノにすぎない。しかし，滅多に見ることのできないそのモノを見たという「観念的快」は，このツアーの参加者にとっては満足感を与えるのである。このようななことは日本国内のオプショナルツアーでも言えることではあるが，日常空間から離れた海外という空間，そして「あの世界的に有名なルーブル」「世界 4 大大会の行われるローランギャロス」という特別な場によって「観念的快」はさらに増幅されるのである。

4. まとめ

今回の研究では，「感性教育」における「体験」の意味を探るために，海外における世界文化遺産体験，芸術体験，バックステージ体験を企画するツアーの現状を調査し，その問題点を検討した。その結果，オプショナルツアーのプログラムは効率と効果を求め，多くの情報と体験をツアー客に提供することができるが，それが故にその体験は希薄化し，「遺産の要素の一部として自らを位置づけ，その関わり合いを体験」することはない。多くのツアー客が得る満足感は，海外という空間，特別な場によって増幅された「観念的快」によるものである。「感性」が「個々の人間がその環境と身体的自己との相関関係を捉える能力であり，感性的価値とは，そのような関係性が含む価値である」[5]のであれば，先の「観念的快」は「感性」を養うための基本的な「体験」とはなり得ない。では「感性」を養う「体験」，「感性的快」をもたらす「体験」」とはどのようなものであるのか。ヴェルサイユ宮殿の庭園の端で，ルーブルで模写をする芸術家の後ろで感じた筆者の「体験」がそのヒントとなると思われるが，詳細な検討は今後の課題となる。

本研究は平成 25 年度～27 年度科学研究補助金（基盤研究（C）(2)）を受けて行われたものである．

引用・参考文献

1）久保正秋（2008）世界遺産ツーリズムにおける「体験」の意義．東海大学紀要体育学部，第 38 号，pp.117-125.
2）山村高淑（2006）ヘリテージツーリズムをデザインすることの意義とその思想．桑田政美編「観光デザイン学の創造」所収．世界思想社，pp.113-116.
3）宮原浩二郎・藤阪新吾（2012）社会美学への招待　―感性による社会探究―．ミネルヴァ書房，pp.311-316.
4）宮原浩二郎・藤阪新吾（2012）前掲書．p.314.
5）桑子敏雄（2005）風景のなかの環境哲学．東京大学出版会，p.83.